

図書館史研究会（仮称）

ニューズレターNo. 3

1982.11.10

第一回図書館史研究会の御案内

時下益々御清祥の御事と存じます。さて、ニューズレターNo. 2ですすでにお知らせしておりました標記の研究大会のプログラム等の詳細が下記の通り決定致しましたので、お知らせ申し上げます。多数御参集くださいますよう御案内申し上げます。

記

日 時 昭和57年12月12日（日） 13：00－17：00
場 所 法政大学 80年館 7階 会議室（地図参照のこと）
〒 102東京都千代田区富士見2-17-1

研究発表総合テーマ 図書館史の課題
参加自由（無料）

プログラム

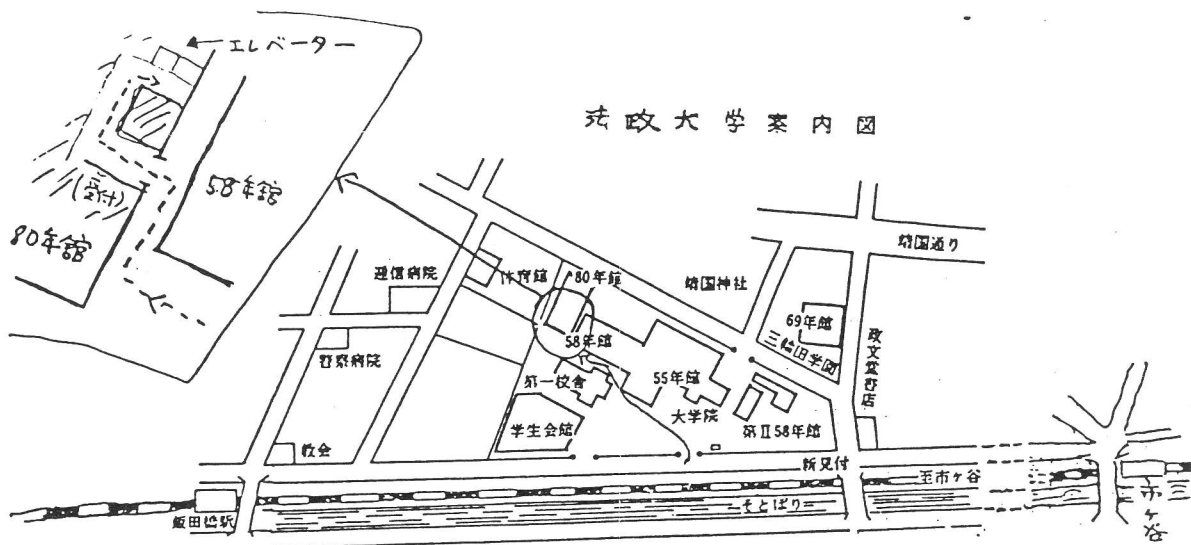
挨拶・趣旨説明	藤野幸雄（図書館情報大学）	13：00－13：30
研究発表	司会 河井弘志（大東文化大学）	
1. 学問、歴史、図書館史、その教育	埜上衛（近畿大学）	13：30－14：00
2. 図書館史研究の課題	松本三喜夫（府中市立図書館）	14：00－14：30
3. 社会変化、歴史学、教育史学、図書館史学—アメリカの場合。		
その史学史的検討—	川崎良孝（椙山女学園大学）	14：30－15：00
討論		15：00－15：20
休憩		15：20－15：30
総会	司会 常盤繁（独協大学）	15：30－17：00
	原案提案 石井敦（東洋大学）	
閉会の辞	小川徹（法政大学）	17：00

*申し込み：参加自由ですが準備の都合がございますので各自葉書で11月末日までに下記宛てにお申し込み下さい。

〒 305茨城県筑波郡谷田部町春日 1丁目 2 図書館情報大学 寺田光孝気付
図書館史研究会（仮称）

*尚、閉会后法政大学図書館新館を見学する予定です。

法政大学案内図



図書館史研究会（仮称）賛同者一覧表

- | | | |
|---------------|----------------|----------------|
| 青木次彦（同志社大学） | 赤星隆子（恵泉女学園短大） | 安達将孝（防衛大学校） |
| *石井敦（東洋大学） | 岩瀬敏生（関西大学） | 上野一（共立女子大学） |
| 植村芳治（熊本県立図） | 裏田武夫（東京大学） | 大滝則忠（国立国会図） |
| 小川剛（お茶の水女子大） | *小川徹（法政大学） | 小倉親雄（ノートルダム女大） |
| 小野泰博（図書館情報大） | 小野沢永秀（日本学振興会） | 加藤三郎（鶴舞中央図） |
| *河井弘志（大東文化大学） | *小川崎良孝（椋山女学園大） | 草野正名（国土館大学） |
| 後藤純郎（日本大学） | 是枝英子（法政大学） | 阪田蓉子（ICU） |
| 坂本竜三（北海道武蔵女短） | 佐藤隆司（図書館情報大） | 塩見昇（大阪教育大学） |
| 芝田正夫（関西学院大学） | 渋川雅俊（慶応大学） | 渋谷嘉彦（相模女子大学） |
| 神野清秀（皇学館大学） | 高橋重臣（天理大学） | 竹内 悠（図書館情報大） |
| 近川澄子（上智大学） | *寺田光孝（図書館情報大） | *常盤繁（独協大学） |
| 長沢雅男（東京大学） | 永末十四雄（田川市立図） | 成山雅康（立命館大学） |
| 根本彰（東大大学院） | 埜上衛（近畿大学） | 原田勝（京都大学） |
| 平田守衛（大津市立図） | 平庭基介（京大付図） | *藤野幸雄（図書館情報大） |
| 藤丸昭（徳島県立図） | 松本三喜夫（府中市立図） | 間山洋八（青森県立図） |
| 三浦逸雄（東京大学） | 三田美代子（山手女子短大） | 三春伊佐夫（山形県立図） |
| 森耕一（京都大学） | 山口源次郎（名大大学院） | 油井澄子（国立教育研究所） |

（五十音順、*印は総会までの世話人）

総会議事録

第一回総会は事実上創立総会とも言うべきものであるが、15時45分より17時まで、常盤繁氏（独協大）の司会のもとで、41名の参加者の活発な討議が繰り展げられた。以下、当日の討議を簡単にまとめて報告する。

先ず、司会者より「会の発足に向けてのこれまでの世話人の活動は暫定的な性格のものであるので、本日はこれらを白紙に戻して十分な討議をして頂きたい」、「世話人でまとめた原案は、これを叩き台として、本日必ずしも決定をみないものはペンディングとし、決められるものだけを決めていきたい」、「但し、原案の 5. 会費と 6. 運営の組織の件については、暫定的であれ決めないと今後会が始動しないので、合意を期待している」旨の発言があった。

続いて、石井敦氏（東洋大）による原案の説明に入った。石井氏は、「本来ならば会の会則や規約についてお諮りせねばならないところだが、今後まだ会が具体的にどのように動くのか、また動けるのか未定の部分が多いので、さしあたっては 1年間を実際に動いてみて、その後正式な規約を作っていきたい、「規約は簡単であれば簡単であるほどよい」とトーマス・ペインもいっているが、本日は大枠だけを決定できればよい」として、原案の 1～ 7について順次説明を行なった。

1. 会の名称は図書館史研究会（仮称）として進める。2. 会の目的・趣旨は趣意書をふまえた上で、「図書館史の研究を目的とする」、「図書館史の充実した討論及び発表の場を設ける」程度で特に明文化せずともよいのではないかと。3. 事業はこれまで種々の御意見を伺っているが、今我々の力量で果してどの程度までできるのか未知数の部分が多い。（1）年次大会、（2）小研究会（地域別に随時）、（3）研究セミナー（夏期等に行なう）、これら（1）（2）（3）で充実した討論の場が期待できよう。（4）機関誌を最低年一度、（5）会報・ニュースレターを随時発行する。事業としては以上が考えられるが、（1）（4）（5）については是非やって行きたいというのが世話人の考えである。

4. 会員については、当面は研究主体が個人であるところから、個人に限定したい。個人会員の資格等については種々の議論があろうが、自由加入でいく。5. 会費は事務費用として、最低 1 000円、学生（院生も含む）は 500円とする。機関誌を出す場合は機関誌代は別扱いとする。6. 会の運営は（1）研究、連絡（2）編集・出版（3）庶務会計の仕事となろうが、これらの仕事は手工業的にやらざるを得ないので、これまでの世話人に何人か加わって貰いたい。7. 事務局は検討の結果椋山女学園大学におちついた。

以上の説明の後、質疑に移った。主な質疑は次の通り、

司会： 1, 2及び全体にわたる問題について御意見を伺いたい。

Q. 外国の例では、A. L. A. や L. A. の場合 Round Tableとして出発したように思うが、図書館史研究会では学会、例えば日本図書館学会のひとつの Dept. として考えるということについては全く検討をしなかったのか。

石井：最初からそのことが問題になり、幾人かの人から提起され、充分検討は行なった。

今までの学会あるいは協会との関わりでやると、プラス面もあるだろうが、拘束もまた多いと思われる。趣意書にあるように「充実した討論及び研究を行ないたい」というのが、スタートのであり、自分たちの力でできるだけやってみて、時期がきて或程度基礎が固った段階で、学会あるいは協会に所属すべしという意見が強くだされれば、その時点で検討したい。今後において充分考えられるところであるが、さしあたっては1年間動いてみたいと考えている。

Q. 例えば日本図書館学会に所属し、その中の有志のグループがこのような研究会を行うにしても、必ずしも矛盾しないのではないか。心配であれば暫定的に一年間の期間を限定して活動を行い、場合によっては期間を延長するというのも考えられる。学会への所属の利点は機関誌の発行や事務局の経費の節約などがある。この会を独自に創らねばならないという積極的な根拠が薄いと思われる。

藤野：特に日本図書館学会への所属ということが問題になった。500名足らずの学会員の現状で、勢力を分散するのは如何かという問題である。ただ、研究会発足の一番の基本は、自分たちの研究を独自に成り立たせたいという気持であり、学会については図書館史の分野の発表を発表の場で制限するやの、また歴史研究を研究として重視しないやの雰囲気若干感ぜられる。微妙な問題であるが、雰囲気としては既存のものに飽き足らずの面があったことも事実である。これらが経過説明であるが、さらに40名ほどの賛同者をえたが、当初はもう少し規模の小さい研究会を考えていたこともある。

河井：賛同者には学会員とそうでない方が半々である。最初から学会に所属して出発すれば落ちる人もでてこよう。このままで進めた方が層としては厚くなるとの議論もなされた。

Q. 研究会や学会の数が、図書館研究者の数に比して、協会や協議会の数が図書館員の数に比して多すぎるように思うが、勢力の分散は避けた方がよいのではないか。また、一党一派をつくるニュアンスもでてくるのではないか。

Q. 危惧の念を持たれる気持も理解できるが原案の方向でいけばどうか。学会や協会等に個人としては加入していない図書館員も多い。

司会：現在の独立した形で進めていき、もう少し様子をみたくうえで、他の学会や協会に所属した方が望ましいという意見が多数をしめるようになれば、その段階であらためて検討することとしたい。当面は趣意書通りで進めさせて貰いたい。

司会：それでは、次に原案の1～7につきご意見を順次お伺いしたいが、1. の会の名称についてはどうか。

Q. (仮称)はどうか、とるのか。

司会：()をとることになる。()をとった形が正式名称となるので、御了承願いたい。2. の会の目的・趣旨についてはどうか。

Q. この種の研究団体の一般的動向としては個人の論文を発表することに力点が置かれることが多いと思われるが、この会に望みたいことは、個人の論文発表重視というので

なく、セミナー等の数を多く設け、議論を交し、相互批判をするなかで、問題提起という形で論文にまとめるといった方向で進めて貰いたい。

石井：特に目的を掲げないで、趣意書を理解するという方向で進めていきたいと思うが。

Q. ニュースレターで紹介記事を排除するということが問題になっていたが、図書館史研究の一つとして、紹介記事も考えて貰いたい。図書館史全体の動きを知るうえで、重要な意義がある。限定条件を設けなくて、広い範囲で考えて貰いたい。また、発表者の質疑応答では一方的でなく参加者すべてが議論に加わるといった有機的な議論の展開を望みたい。

司会：機関誌にどういうものを載せていくかは、今後の大きな問題だと思う。

河井：紹介記事を載せることには全面的に賛成である。紹介記事という断りなしに論文として出てくるものへの危惧、それがニュースレターでの本意である。先行の業績を抑えておくことは研究にとって重要なことなので、例えば、文献展望のような紹介及び論評は積極的に行なうべきだと思う。

藤野：賛成である。紹介記事に E twas neués これまで知られていなかったなんらかの情報加わればなおよいのではないか。

Q. 会の目的・趣旨は形式を整え、目的を明記する必要があるだろう。

Q. 事業の方が大切だ。文章化はまかせればどうか。

司会：文章化については運営委員会で練り直して後日ご意見を伺うこととしたい。次の 3 の事業はどこまでできるか問題があるが、ご意見を伺いたい。

Q. 原案の (1) ~ (5) には共同研究が入っていないが、年間の統一テーマを決めて雑誌を刊行しているグループもある。文献展望をいろいろな角度、視点から取りあげるとか、統一テーマのもとに機関誌を編集するとかしてはどうか。

Q. 意見の交流・交換の場を設け議論の活性化を促すとともに、発表したものであっても、適切でなければ、機関誌には載せないといった、思い切った方針が必要ではないか。

Q. 機関誌投稿の際にはレフリー制を設けることを考えて貰いたい。

司会：事業として早急にどれを行なうかの決定はできないので、運営委員会で現実的な問題をも含め、検討させて頂きたい。4. の会員については、特にご異議があれば。

Q. 国立国会図書館への納本分や公共図書館への頒布などに配慮してほしい。

河井：機関誌は会員だけでは捌き切れないであろう。有償で捌けるルートをつけておいた方がいいであろう。

司会：流動的な問題がいくつも出ると思うが、原案で了承願いたい。5. 会費は連絡費、ニュースレター等の郵送費が主だが、動いてみないと分からないところがある。

藤野：最低の線でやり、値上をししない方向で考えてほしい。

司会：最低限に抑える方向でやっていきたい。6. の運営についてご意見を頂きたい。

石井：7名でやってきて苦しいので、もう少し加わって貰いたい。事務局の移る名古屋、関西、それに図書館協会、国立国会図書館などから。

Q. 会計監査も必要だ。

司会：運営委員は後刻、調整して決めさせて頂く。7.事務局は川崎先生にお引き受けして頂くことになるが、特になければ、お願いしたい。その他なにかご意見があれば伺っておきたい。

Q. 会の発足を図書館関係雑誌で流す必要があろう。

Q. 歴史学会はアマチュアリズムから出発することが多い。正面から理論を闘わせる姿勢よりも、あまり構えないで、論文でなくとも、事実の発掘などもどしどしやり、アマチュアの方が沢山おられる郷土史関係者を吸収していく位がいいのではないか。歴史学会の一斑ランチ位になってもいいのではないか。楽しい会にしてほしい。

藤野：後藤先生より多額の御寄付を頂き、これまでの会計をまかなくなってこられた。

Q. 会費の他にカンパという資金方法も考えればどうか。

石井：どの程度やれるか分からないが、これから一年やらして貰うことになる、できるだけやっていきたい。

司会：本日はありがとうございました。

(文責：寺田光孝)